

## 音楽学専攻 作文課題

■以下の文章を読んで、問いに答えなさい。

演奏の場の一種のオムニブティコン（相互監視）化は、様々なジャンルで共通して見られ、聴取態度に影響を及ぼしてきた。クラシック音楽のコンサートで咳払いをとがめるような態度はもとより、歌舞伎や宝塚歌劇、アイドルのコンサートといったファンダム※が確立した芸能であれば、拍手のタイミングや掛け声から、サイリュームのようなケミカルライトやうちわの色・使い方まで、観客間で「適切なふるまい」が、多くの場合は暗黙で共有され、相互監視の様相を呈している。

しかし、こうした集団規範は、あらゆる聴取の場で効力を発揮するわけではない。これまでの、特に日本で展開されてきた聴取論において、集団規範に縛られないような聴取態度を表すのに使われてきた表現のひとつが「軽さ」である。その先駆である渡辺裕は、作品全体の意味や機能を解釈して作曲者の精神性を聴き取ることに重きを置く 19 世紀的・禁欲的な「純粹鑑賞」の反動として現れた、構造にとらわれず細部に耳を傾けて音との戯れを楽しむポストモダンの聴取様式として、「軽やかな聴取」という概念を提示した。

（葛西周「旅するオーディエンス——温泉地の聴取環境考——」より一部省略）

※ファンダム：ファン集団のこと

1. クラシック音楽のコンサートにかんする「適切なふるまい」の例をあげなさい（「咳払いをとがめる」は除く）。
2. 「純粹鑑賞」とはどのようなものか。本文を補足するかたちで説明しなさい。
3. 「軽やかな聴取」とはどのようなものか。本文を補足するかたちで説明しなさい。
4. あなたにとって、クラシック音楽の理想的な聴取形態はどのようなものか。自由に論じなさい。